

はじめに

現構成員による生涯学習推進委員会議は、令和6（2024）年6月から開始し、主として各委員の活動報告をふまえて今期の協議課題について検討を重ねてきた。その議論の中から今期のテーマ「住民交流の促進に資する千代田区の生涯学習・社会教育～長期居住者としての高齢者と短期居住者としての若年者※の世代間交流も視野に入れて～」を設定し、計9回の定例会議の討議をとおして論点の整理・検討に努めてきた。

今期の課題は、令和6（2024）年6月の第12期中央教育審議会生涯学習分科会の議論をふまえて設定された。本議論は近々の社会教育法の改正に繋がる可能性が示唆されるとして注視されている。

さて、社会教育法が昭和24（1949）年に制定されてこのかた、日本社会における社会情勢の変化は著しく、超少子高齢社会の事態の深刻さや高度情報社会への移行、地域における住民交流の希薄化およびそれに伴う社会関係資本崩壊の危機、さらには経済・社会・文化によるグローバル化の進展など、日本社会を取り巻く状況は大きく変化した。一方で、こうした社会情勢の変化に対応できていない現行法令の限界も指摘される。そうした本分科会の議論の方向が、千代田区の生涯学習・社会教育のあり方を改めて精査・検討する呼び水になったことは言うまでもない。

また、こうした議論に加えて、千代田区では、20歳～29歳の転入者が多いという反面、「仕事都合」で転出する短期居住者の若者の比率が高いことも課題として指摘される。一方で地域コミュニティの基盤を支える担い手としての長期居住者の高齢化が進んでいる。このような実態をふまえて、千代田区として若者の定住促進に向けてどのような取り組みが可能かという議論の必要性についても提起された。

以上のような議論の経緯と論点をふまえて、本提言は、考察の視点として以下の5つの柱を設定している。すなわち1. 社会人のリカレント教育への取り組み、2. デジタル社会への対応、3. 共生社会の実現と社会的包摂の視点、4. 世代間交流の促進とアウトリーチ活動、5. 社会教育人材の育成支援と活躍機会の拡充、という5つの柱で構成されている。加えて、こうした視点は、現在、検討中の（仮称）新九段生涯学習館や新スポーツセンターの運営にも反映されることが期待されよう。

本提言を出発点として、異なる世代や文化が持つ知識や経験の共有が、地域コミュニティの活性化や防災力などの向上に向けた社会関係資本の再構築に繋がり、千代田区の地域コミュニティ全体の持続可能性を高める一助になれば望外の喜びである。

※本提言で使用する「若年者」は、厚生労働省が定期的実施している若年者雇用実態調査の定義に基づいて満15歳から35歳までの若年労働者を指す一方で、「若者」は、本委員会における意見交換や調査等における文脈をふまえ厚生労働白書の定義を援用し、主として高校生・大学生・新社会人をその対象者として規定した。「若年層」は、対象者を限定せず両者の意味を含む包括的概念として広く解釈した。

1. 社会人のリカレント教育への取り組み

■現状と課題

令和6（2024）年6月の第12期中央教育審議会生涯学習分科会では「時代のニーズに即して職業上新たに求められるスキルを修得するためのリスキリング、社会人を対象とした職業能力等の向上のためのアップスキリングを目的としたものにとどまらず、社会の変化に対応して年齢を問わず必要となる基礎的なスキルの習得のための学習や、自己実現を図る上で必要となる学習等も含め、リカレント教育は幅広い層を対象として提供されるべきである。」と指摘している。

千代田区では、地域交流・人材育成を目的とした「ちよだ生涯学習カレッジ」や60歳以上の区民の方を対象とした「かがやき大学」、ビジネススキルアップや江戸・東京の歴史文化、アートなど多彩なテーマを学ぶ「日比谷カレッジ」が設置されている。九段生涯学習館やかがやきプラザなどの公共施設では、区民以外の方が参加することができる講座やセミナーが開催されている。また、区内の大学・カルチャーセンターなどで講座や講習会を受講した場合に受講料の一部を補助する「バウチャー制度」や区民自らが講師となり文化・芸術・スポーツ・趣味などを学びあう仕組みの「人材バンク活用講座」など、学びを推進するための制度が設けられている。この他にも、千代田区内の徒歩圏にキャンパスが近接する6大学（大妻女子大学・大妻女子大学短期大学部、共立女子大学・共立女子短期大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、法政大学、専修大学）が連携し共同開講授業・学生合同ボランティア・千代田区内の課題解決・フィールドワーク等を実施する「千代田キャンパスコンソ」をはじめ、区内の企業・大学と連携した様々なプログラムが実施されており、社会人のキャリアアップや再就職支援、地域活動への参加促進など、リカレント教育の裾野は広がりつつある。

千代田区で実施されている事業の中で、学びを通じて交流し、学びの成果が地域活動に繋がっているものもあるが、区の生涯学習事業において、20代・30代の若年層の参加率は高くない。若年層・現役世代の参加率が低い理由として、以下が考えられる。

令和4（2022）年7月の『生涯学習に関する世論調査』（文部科学省）によると、若年層や現役世代（18歳～49歳）が学習をしない理由として「仕事が忙しくて時間がない」、「家事・育児・介護などが忙しくて時間がない」を上位に挙げている。また、18歳～49歳においては「きっかけがつかめない」も上位の理由として挙げている。また、「あなたは、これから学習するとした場合、どのようなことを学習したいと思いますか」という設問に対し、「健康やスポーツに関すること（39.2%）」、「仕事に必要な知識・技能や資格に関すること（35.2%）」、「インターネットの知識・技能に関すること（35.2%）」の割合が高く、これらのニーズに対し十分なプログラムが提供されているか検証が必要である。

また、若年層に対する効果的な広報手法が不足していることが示唆されており、情報伝達手段の見直しが求められる。20代、30代の女性をターゲットとした事業「ちよだイズム倶楽部」では、ターゲット層の7割が利用しているInstagramの広告での募集を行い、広告が表示された回数は17万回、広告

から区のホームページを見に行った回数は 2,400 回、申込者数は 16 名（定員 30 名）という結果（国際平和・男女平等人権課）となり、若い世代の参加を促進するためには更なる工夫が必要である。

一度の参加で終わるケースが多く、継続的な学びや地域活動への定着が進んでいない。参加者同士のネットワーク形成や、学びを地域活動・キャリアに活かす仕組みが不十分であり、これらの一層の充実が求められる。

令和 7（2025）年 6 月、「ちよだイズム倶楽部」の参加者（主として若年層が対象）に行った質問紙調査（巻末資料 1 参照）によれば、「いろいろなイベントがあっても良い」、「専門性の高い趣味講座があると良い」の回答に見るように、興味と機会が合致すれば参加意欲はあると思われる。

また、令和 7（2025）年で 2 回目となる神田錦町大歓迎会（町会が主体となって地元企業への新社会人を迎えるイベント）において行った新入社員や学生等の若年層への聞き取り調査（巻末資料 2 参照）によると、専門的な趣味講座やスタートアップ企業への関心が高いことがわかった。

■提 言

区では幅広い世代を対象にさまざまな学習機会を提供しているが、千代田区の若年層は 2 万人近いにもかかわらず、居住期間が短い転入転出者が多く、地域との接点や区が行っている学習機会との関わりがあまりない。現状では若年層社会人を対象とした区の生涯学習・リカレント教育の機会は少なく、参加者も多くない。こうした若年層、社会人が求める学習ニーズを改めて把握し、参加を促すため、以下を提言する。

（1）講座の時間帯や実施方法の見直し

- ①土日や夕方の時間帯にも講座を開催し、働く世代が参加しやすい環境を整える。
- ②オンライン講座やアーカイブ配信の導入など、IT を活用した柔軟な参加方法を提供する。
- ③講座内容のデジタル化（資料の PDF 化、動画配信など）により、時間や場所にとらわれない学びの機会を創出する。

（提言の背景）

- ・子育て支援講座などを平日午前中だけでなく、土日や夕方にも開催し、昼間働いている保護者も参加しやすいようにする。
- ・若い世帯や働く世代の実態に合わせて、土日開催や IT 活用（例：二次元コードでの意見収集）など、若年層をキャッチできる仕組みを強化する。
- ・子育てする女性の再就職をサポートするために、オンラインで勉強する機会や子どもの一時預かり、学習修了後に就職先を紹介するサービスを企業と協力している自治体がある。
- ・社会人のリカレント教育について、企業が主体的に取り組んでいかなければならないが、日本の企業では金銭的な面などで難しく、公的社会教育として学び直しに対する支援を行う必要がある。

（2）生涯学習に関する情報発信・PR の強化

- ①千代田区の魅力（歴史・文化）を積極的に発信する。

②SNS やアプリ等を活用し、若年層へのアプローチを行う。

(提言の背景)

- ・地域コミュニティ活動で旧小学校校歌保存や地域の歴史を YouTube で配信している。また、いろいろな人が千代田区に関してよかったところをどんどん投稿し、共有する SNS サイトを配信している。区の知識や経験や思いを知ることができて、千代田区をより好きになるきっかけになると考えられる。
- ・町会長など地域を代表する方に地域の特色やまちへの想いや歴史、今後についてどう考えるかなどをインタビューしてまとめることで、千代田区に昔から住む人々の想いや区の魅力が若い世代に伝わり住み続けたいと思ってもらえるのではないかな。
- ・生涯学習館で実施している講座等の情報が区民へ行き届いておらず、知人経由で参加する区民が多い。もっと区民に広く知らせるための PR が必要である。
- ・SNS 等デジタルツールを活用したボランティアやイベント情報発信の強化など、若い世代にも届く発信方法を工夫する。
- ・ちよだイズム倶楽部の広告は 20 代・30 代が普段見ている Instagram や Tik Tok に比べて堅い印象を受けた。若い世代に刺さる広告についての検討が必要ではないかな。

(3) 学びを促すしかけと学びを続ける仕組みの構築

①生涯学習・社会教育を通じた住民交流の仕組みづくりを行う。

②施設利用やイベントに参加しやすくなるよう環境を整備する。

(提言の背景)

- ・ちよだ生涯学習カレッジなど 1 度参加した若い世代（新住民）に継続してもらうために、同窓会や交流会を企画する。
- ・千代田区の特徴として向学心のある方が多いので、いきなり地域デビューではなく、まずは教養やスポーツなど関心のある講座に出てください、そこでボランティアや地域活動の情報を提供することで仲間づくりに繋げる。
- ・人材を集める際、目的を明確にすれば人は集まりやすいが、広い意味で担い手をつくる、継続的に活動するという目で見ると時間がかかってしまう。
- ・千代田区は皇居が真ん中にあるため、他地区への移動手段としてコミュニティバス（現在は福祉バス）の経路を工夫し、区内を気軽に回遊することができると良い。
- ・継続して活動していくためには活動資金や会場の問題がある。区の施設で日頃の成果を発表することができる場所は限られており、民間の施設を借り上げると費用の負担が大きい。
- ・九段生涯学習館では色々なサークルを中心に区民の方たちが色々な活動をされているが、表に見えにくい。

(4) 若年層ニーズの把握と分析

①若年層に対するアンケート・調査を実施し、興味のある内容を把握する。

②既存の事業で参加者へのヒアリングや参加状況の分析を行い、若年層の参加に繋がる実施方法を検証する。

③分析結果によっては、リスキリングの一環としてAI（人工知能）の活用方法やデジタル等のスキルを学ぶ機会をちよだ生涯学習カレッジ等の生涯学習機関・講座を活用して若年層に安価で提供する仕組みをつくることも必要とされる。

（提言の背景）

- ・生涯学習機関の講座や事業の年代別参加状況を分析し、若年層の参加ニーズや社会的排除に対して量的・質的な調査を行い若年層の声を施策に反映する。
- ・歴史・文化・芸術関係の活動団体やサークル、外国人支援団体、福祉関連の団体など既存の多様な活動グループにヒアリングを行い、対応策を検討する。
- ・若者側からはビジネススキルに繋がるものへのニーズがある。
- ・ダンスやエアロビクスなどはやり方次第では若い世代・高齢世代共通で取り組むことができるのではないか。
- ・若い世代が参加するためには個人のスキルアップ等メリットになるようなものが必要である。
- ・大学のフリーマーケットで茶道具を並べていたら学生が「興味がある」と言って購入していった。若い世代でも高齢者層が活動している内容に興味を持っている人はいる。

2. デジタル社会への対応

■現状と課題

千代田区では、デジタル社会への対応として、ICT（情報通信技術）講座やオンライン活用、企業・大学との連携など多様な取り組みを進めている。一方で、デジタルデバイド（情報格差）の解消、情報発信の工夫、継続的な学びの仕組み、多様なニーズへの対応、行政サービスのデジタル化推進など、今後解決すべき課題も多く残されている。デジタルデバイドの解消について、区民として情報へのアクセス権は有するが、情報へのアクセスが十分にできず情報を得られず、自らの権利の行使が制約される区民が存在する。区の広報もパソコンやスマートフォン等の情報機器の普及や SNS の利用によって、様々な情報へのアクセスの利便性は紙媒体よりも容易になり、講座やイベント参加者の募集にあたってデジタル媒体を利用するケースが増えている。従来の回覧板に加え町会の連絡に LINE を活用している例も増えつつある。

今後は、誰もがデジタル社会の恩恵を受けられるよう、きめ細やかな支援と柔軟な仕組みづくりが求められる。また、区のホームページや SNS、広報紙などで情報発信は行われているものの、高齢者や障害者など、デジタル機器やインターネットの利用が難しい層への支援が十分ではない。スマートフォンやパソコンの操作に不慣れな方が多く、ICT 講座の参加者も固定化しがちで、新規参加者の掘り起こしが課題である。とくに高齢者や障害者にとってはハードルが高い面がある。

■提言

高齢者活動センターでは、高齢者に対するスマホサロンやパソコンサロンを提供している（第 13 期提言『コロナ禍の生涯学習推進における ICT の活用と支援の可能性』を参照）。

この取り組みは、困りごと解決を学生や企業の社員が高齢者に教えるボランティアによって実施しているが、高齢者と若者との間のリアルな会話から繋がりが生まれることで高齢者や若者の孤立や孤独の予防にも役立っている点が着目される。

区の生涯学習施策においても、デジタルスキル習得の機会を充実させるとともに、情報発信や行政サービスのデジタル化を進め、自治体 DX（デジタルトランスフォーメーション）の実現に寄与する取り組みを推進する必要がある。デジタル技術を使ったスキルシェアリングを介して、若者と高齢者・障害者との多文化多世代交流を促進していくために、以下を提言する。

(1) 高齢者・障害者に対するデジタル支援

- ①デジタル講座の実施や学生・ボランティアによるサポートなど支援体制を強化する。

②デジタル機器の操作性やアクセシビリティを向上させ、誰もが安心して利用できる環境を整備する。

(提言の背景)

- ・スマートフォンの使い方がわからない高齢者の方は多い。民間の会社に行けば有料で教えてもらえるが、高齢者センターで地域の学生・ボランティアが高齢者の方に使い方を教えることで交流が生まれている。
- ・ユニバーサルデザインや読み上げ機能により誰にでもわかりやすく情報を展開する。
- ・利用者の IT リテラシー格差や、セキュリティやプライバシーにも考慮が必要である。

(2) デジタル化による利便性の向上

- ①イベント・ボランティアなどの情報をデジタル掲示板へ掲載し、LINE で配信する。
- ②ボランティアのポイント制度やキャッシュレス決済の導入を行う。

(提言の背景)

- ・千代田区イベント掲示板に情報を掲載し、ワンタッチで申込が出来ると便利である。
- ・LINE を見る人は多いので、LINE で1週間の事業予定や区民優待情報、ボランティア募集などを配信すると良いのではないか。
- ・YouTube のように閲覧・検索履歴に応じておすすめ情報が出てくると、興味のある情報を効率的に受け取ることが出来る。
- ・地域・学校協働活動の取り組みの中で、地域の活動に対して協力することができる人材を登録する「polyfit」というものがある。神田一橋中学校は保護者の方やPTAの方が中心となって活用している。区でもそのようなシステムを積極的に打ち出し、人材をデジタルで登録するシステムをつくると活動の基盤となるのではないか。
- ・有償ボランティアをデジタルで募集する場合、二次元コードや電子マネーで支払いが出来ればスムーズである。
- ・ボランティアをポイント制度化することで、若い世代を取り込むことができるのではないか。「ポイ活」という言葉が流行るくらいポイントは重要なものとなっている。貯めたポイントはスポーツセンターなど区の施設で使用できると良い。

3. 共生社会の実現と社会的包摂の視点

■現状と課題

障害者、外国人等を含めた多文化多民族間の交流を通して、地域コミュニティの維持・活性化を千代田区としてどう進めていくのか。区では、障害者、外国人、若者、高齢者など、多様な背景を持つ人々が地域社会で共に生きる「共生社会」の実現を重要なテーマとして位置づけている。近年の社会教育研究においても、障害者や外国人、若者などは社会的排除の対象となりやすいという議論が蓄積されている（日本社会教育学会編 2006:1-264）。こうした指摘をふまえ、本提言書では、社会的包摂の観点から、これらの人々に対する合理的配慮や学びの機会の提供について検討した。

令和6年度末時点における千代田区の状況を見ると、身体障害者手帳の所持者は約1,500人、知的障害者（児）「愛の手帳」の所持者は約250人、精神障害者保健福祉手帳の所持者は約650人となっている。障害者への「合理的配慮」（例：手話通訳、物理的・制度的および文化・精神面での意識上のバリアフリー環境など）の徹底が求められる一方で、障害の程度や種類によっては集団活動への参加が難しい場合もあり、個別対応の難しさが指摘されている。区では日曜青年教室、社会福祉協議会では障害者、若者や高齢者への支援・連携として多世代交流Ciao！（チャオ）事業が行われている。

令和7（2025）年の住民基本台帳によると千代田区総人口、約6.9万人のうち約4,000人（約6%）が在留外国人で、国別には中国、韓国、台湾が約7割を占め、その数は増加傾向にある。区では国際交流・協力ボランティアバンク、国際交流・協力ボランティア養成講座等を通じて共生社会実現に向けた施策を行っているが、日本語教育だけでなく、母語や文化的アイデンティティの維持、多文化多民族共生の視点が十分に制度化・定着していない現状がある。

区で年に1回開催されている国際交流フェアでは国際交流・協力ボランティアが参加者の通訳や誘導、ワークショップの補助を行っている。国際交流・協力ボランティアに対して養成講座の実施やボランティアバンクを通じて通訳、日本語の学習、ホームビジット（国際交流の一環で、外国人を自宅に招いて交歓したり、家庭の様子を見せたりすること）などの活動を紹介しているが、活躍の場が少ないことが課題となっている。

令和7（2025）年の内閣府孤独・孤立対策推進室の調査によると、20～29歳の若者の約5割が「孤独を感じている」との結果もあり、社会的ネットワークからの疎外や孤立が深刻な課題となっている。若者の声を拾い、社会参加や地域活動への接点を増やすための仕組みづくりが必要である。

■提言

障害者、外国人、若者、高齢者など、多様な背景を持つ人々が地域社会で共に生きる「共生社会」の実現は、地域コミュニティの維持・活性化に向けた重要な課題である。

区では、在留外国人の増加や若者の定住率の低さ、障害者を取り巻く合理的配慮や参加機会の確保など、社会的包摂の観点から取り組むべき課題が複合的に存在している。

こうした現状をふまえ、区として、多文化多民族間の交流を促進し、障害者や外国人、若者を含む多様な人々が、交流・参加・参画を通じて地域とつながり続けられる仕組みづくりが求められている。

本提言では、共生社会の実現に向けた支援体制の強化を柱として、以下の取組について提言する。

(1) 共生社会の実現に向けた支援体制の強化

①国際交流協会のような組織的に支援する体制を整える。

②日本語・日本文化の学習機会の提供や、防災情報の多言語発信など総合的な災害時の支援体制を検討する。

(提言の背景)

- ・武蔵野市や杉並区では、国際交流協会（多文化共生や国際交流を推進する団体）があるが、千代田区にはない。創設が必要ではないか。
- ・増加しつつある在住外国人が、今後町会とかかわり地域の担い手となることが期待される。一方、全く日本語が話せない方などは地域で活動することが難しい。行政手続き上、翻訳などのサポートはあるが、区として日本語を教えたり、交流の手助けをしたりする仕組みはない。
- ・外国籍の方が増えている状況で、災害時の協力支援体制をどうするのか検討が必要である。
- ・教育現場では、まったく日本語が話せない子に対して1人通訳の人がつく。これから先、外国籍の子どもが増えたときに対応していけるのか。
- ・千代田区の場合「ちよだ日本語カフェ（千代田区にある外国人のための日本語教室で、ボランティアが日本語会話と学習をサポートする。）」はあるが、民族語などを教える機会は定着していない。
- ・秋葉原には外国人がたくさんいるが、コミュニティに参加してもらうようなアイデアや取り組みをしていない。より多くの人に地域コミュニティに関わってもらうために、検討する余地はある。
- ・千代田区の複数の町会から共生社会の実現についての考えを聞いてみたい。地域ごとの特色で対応が異なる可能性がある。
- ・滞在目的や在留期間によって、学習意欲に差が出てくるのではないか。永住される方にとっては日本語を学べる機会がたくさんあったほうがいい。
- ・ボランティアによる日本語教室はオンラインや対面で開催されているが、オンラインの講座は人気があるらしい。
- ・ホームビジットでお盆やお正月などの日本の文化を体験したいという要望はあるが、協力してくれる方を見つけることはハードルが高い。
- ・学校や活動の場で、中国人の保護者を持つ子どもが多く、中国語の歌には挑戦できなかったものの、さまざまな国の歌を取り入れることで、母語を話す子どもが発音の手本になるなど、国際的な交流や学びの機会を作ることができたと感じている。
- ・昔、保育園で外国人保護者からPTA会費を集める際、文化の違いで徴収が難しかったが、英語に翻訳できる保護者が規約を訳してくれたことで初めて会費を受け取れた。現在はPTA活動も変化していると思うが、文化の違いは災害時などにも影響すると思われる。

- ・千代田区が多文化多民族をテーマにした学習プログラムや学習講座をつくる必要があるのではないか。

(2) 社会的包摂の視点をふまえた障害者が交流・参加・参画できる環境の整備

①障害者に対する合理的配慮と支援体制を強化する。

②障害者の交流と参加・参画を促進するための仕組みづくりを検討する。

(提言の背景)

- ・合理的な配慮として、学習者が手話をもとめたらボランティアをつけるような仕組みが必要ではないか。
- ・障害の程度と種類によってできることとできないことがある。そういった側面によりアプローチが非常に難しい。
- ・海外は支援学校というものはあまりなく、障害者が通常の学校に通うことができるよう支援者を学校に送り込んでいる。
- ・施設面ではエレベーターが完備されており、障害者の方が運動会などに参加しているが、広く障害者の方に来てもらいたいというアピールは実施していないのではないか。参加したくてもきっかけがない障害者の方がいるのではないか。
- ・音楽は世代や国籍、障害の有無に関わらずみんなで楽しむことができるので、交流のきっかけになるのではないか。
- ・社会福祉協議会では障害福祉分野の様々な関係機関と連携しながら、困っているので助けてほしいという障害者の方と支えたい人をコーディネートし、活動を生み出す取り組みを行っている。
- ・一般的には本人が差別や排除を受けることが多いが、家族が対象となることもある。今後はこうした視点も社会的包摂の検証に取り入れる必要があると感じている。
- ・障害者本人のことを知っていると、作品展などでは本人の魅力が伝わり、交流の場が楽しいものとなる。現状では顔見知りになる場面が限られているため、福祉まつりなどで広く触れ合える場が必要である。
- ・障害者や小さな子どもを持つ母親が相談先の予約が取れず、悩みを抱え込む状況がある。一時預かりや放課後支援のキャパシティが小さいため、重度の子どもを受け入れる場や放課後サポート体制をもっと広げる必要があると感じている。
- ・スポーツ推進委員として、昨年度は障害者も楽しめるボッチャとモルックを行った。今年度はモルックのみだが、講習会や大会への障害者の参加は少ない。誰でも参加可能と募集しているものの、障害者に対する周知不足が課題だと感じている。
- ・千代田区には大学や企業が多く、ボランティア希望者も多いが、活動の場が不足している。具体的な取り組み内容と必要なサポートを明示し、ボランティア団体と活動を繋ぐ仕組みを作れば、障害者スポーツへの支援がスムーズになるのではないか。
- ・障害者も外国籍の方もマイノリティと言われる人たちも同じように結果の平等が実現できるような仕組みにしていきたい。

4. 世代間交流の促進と

アウトリーチ活動

■現状と課題

千代田区は、20歳から29歳の若年層の転入が非常に多い一方で、若者同士や地域との交流は必ずしも十分に進んでいるとは言えず、地域との関わりが希薄になりやすい。

しかしながら、若者が持つ多様な価値観や行動力、柔軟な発想は、地域コミュニティの活性化や千代田区のさらなる発展にとって重要な地域の人的資源であり、これらの力を地域の中で生かしていく視点が求められている。

「ちよだイズム倶楽部」への質問紙調査（巻末資料1）および神田錦町大歓迎会の参加者を対象とした、回答者の自由な語りを尊重した半構造化インタビュー（巻末資料2）からは、「交流」というキーワードが多く挙げられた。

これらの調査結果からは、長期居住者（高齢者）が受け継いできた町会の文化や気質の中に、若者の思考や新たな文化を受け入れる素地があることがうかがえる。

特に、長年にわたり継承されてきた伝統的な祭礼の仕組みは、居住歴の長い高齢者と居住歴の短い若年者との交流を促進する上で有効な手法として参考となる。

今後は、こうした地域の人的資源を生かしながら、若者が地域と継続的につながり、参画していくための仕組みづくりが課題である。

また、区内には麴町地区、神田地区をはじめ、地区ごとに特徴の異なる居住者や在勤者が存在している。地区によって世代間交流や町会活動の活発さには差が見られ、賃貸マンション居住者や新規転入者については、地域活動に関する情報が届きにくく、参加のハードルが高いとの声も聞かれる。

町会や地域活動への参加は個人の自由である一方で、新たな住民や若者が自然に関わることのできる雰囲気づくりや参加のきっかけを整えることは重要な課題である。

伝統行事や町会活動、生涯学習事業を通じた世代間交流が一部で実現しているものの、地域差や参加格差、若年層の孤立、情報発信やアウトリーチの工夫不足など、解決すべき課題は多い。

今後は、時間帯や学習テーマの工夫に加え、高齢者の新たな役割の創出なども含め、柔軟で多様なアウトリーチ活動を展開していくことが求められる。

■提言

町会は、戦前から戦後にかけて、地域集団として「親睦機能」や「共同防衛機能」など、多様な役割を担ってきた（菊池美代志 1973：134-135）。

現在においても、居住歴の長い高齢者は、地域集団の中心的な存在として、区の歴史や文化への深い理解を有するとともに、地域内外にわたる人的ネットワークを築いている。

一方で、居住形態やライフスタイルの多様化、若年層の転入・転出の増加、在勤者・在学者の存在などにより、従来の町会活動の枠組みだけでは、地域との関わりを持ちにくい層が増えている。

こうした中、錦町でのイベント事例に見られるように、町会が企業等と連携し、若年層や在勤者との新たな関わりを生み出す取組は、時代の変化に対応した「新しい町会の形」として注目される。

以上をふまえると、世代や立場を超えた交流の機会を創出するとともに、地域の特徴を生かしながら、多様な人々が無理なく関われる仕組みを構築していくことが重要である。

そこで本提言では、共生社会の実現と地域コミュニティの維持・活性化に向け、具体的な取組について提言する。

(1) 世代間の交流のきっかけとなるイベント・事業の展開

①災害・福祉・文化・音楽・スポーツ分野の事業・イベントがさらに活発化するよう

多世代にはたらきかける。

②世代間(若者・高齢者)の橋渡しと交流事業への参加のきっかけづくりを行う。

(提言の背景)

- ・PTAの繋がりから保護者のコーラスという生涯学習のきっかけとなった。昔は合唱をやっていたが今はやっていない人たちを取り込むことが出来たら、その人にとっての生涯学習が始まるのではないか。
- ・新しく建った分譲マンションの方々からの提案で防災訓練をやることになった。マンション内だけでは小規模となるため、周りの町会も一緒にやることができなかつたことだったので、せっかくなら楽しくストレスのない防災訓練とするため炊き出し訓練などを行ったことが、新住民との交流のきっかけとなった。
- ・千代田区には神田祭りを始め、盆踊りなど、各地で様々な行事が行われている。お祭りでは長年やっている年配の方が若者にノウハウを伝え、若者がスキルを身に付けていくため、「若者」と「高齢者」の世代間交流の場が出来上がっている。こうした場をどのように維持していくかが重要である。新住民の方には、やっている側が楽しそうにしていると興味を持ってもらえる。
- ・昔は麴町区、神田区で分かれており、麴町は武家屋敷、神田は町人の町で、現在もそういう影響が双方残っている。麴町で町会活動をしていると、麴町の人とは繋がれるが神田の方とはなかなか繋がることができない。それが千代田区文化芸術協会に加入したことにより、麴町・神田が分け隔てなく繋がることができるようになった。文化や音楽は交流の起点になると思う。
- ・多世代交流の中で若い世代をどのように巻き込んでいくかという視点について、防災がキーワードとなるのではないか。
- ・多世代交流では「交流そのもの」を目的にすると参加が難しい。社会福祉協議会では、スマートフォンの使い方支援など、具体的な課題解決型の取り組みを通じて担い手を募ることで、活動のイメージを持ちやすくしている。こうした機会は、孤立や育児不安の予防、親子が楽しめる場づくりにも繋がりが、漠然とした交流よりも具体的なテーマを打ち出すほど参加者が集まりやすい傾向がある。

- ・世代間交流は、虐待、孤独死、育児不安など地域の課題を解決するために重要である。人との繋がりや相談できる相手があることで、高齢者の孤立防止や子育て世代の不安解消に繋がり、将来的に地域を支える担い手を育てるためにも、多世代が交流することが必要だと考えている。
- ・若者の参加率を高めるには、スポーツや健康を軸にした仕組みづくりが有効ではないか。経済的な理由でジムに通えない若者や高齢者に、ダンスやエアロビクスなど身近で低コストな活動を提供することで、多世代が自然に交流できる。重要なのは、積極的な人だけでなく、参加に消極的な人にも手を差し伸べるアプローチ（アウトリーチ活動）を工夫することである。
- ・千代田区で孤独を感じている若者はどれくらいいるのか。高齢者（長期居住者）と若者（短期居住者）が繋がり、人生経験豊かな方が若者の悩みごとを聞きコミュニケーションをとっていきことはできないか。
- ・学生が地域の保育園に行き、幼児と交流している事例がある。
- ・中学生、高校生でも半纏をつくるような取り組みは非常に盛り上がり、最近ではアイデアや企画力が高くなっていると感じる。一方で、挨拶などのコミュニケーション面で課題を感じている。神田祭に参加し、地域の方と接する機会があると良いと思った。
- ・活動を引っ張っていくような積極的な人が一人いるだけで大きく変わる。グループLINEで誰かが提案すると、賛同する流れが生まれ、活動が前向きになる。

（２）地域ごとの課題の整理

①地域の特色をふまえて町会加入・イベント参加のハードルを下げる。

②地域活動が活発な町会の事例を参考にし、今後の事業・イベントのあり方を考える。

（提言の背景）

- ・各町会の会長からこういう課題がある、区でこのような取り組みをしてもらえると良いというご意見をもらったり、新住民の方から町会に入りづらい原因を聞き取ったりすることで、課題がみえるのではないか。
- ・新しいマンションが建っても間に入っている業者によって積極的に町会に加入を促す場合とそうでない場合がある。また、新しく加入する方にとって町会に加入するとどのような利点があり、どう町会の一員として参画できるのか、具体的に示せると良い。
- ・町会によっては住民に対してアプローチを行っていなかったり、イベントを企画していなかったりするため、地域によって活動に差がある。
- ・町会等が開催するイベントで場所の問題がある。道路や公園で実施すれば人が集まりやすいが、使用許可を得るのが難しく、手続きも複雑でハードルが高い。
- ・昌平音楽祭は昌平小学校で活動している合唱の団体が参加できるもので、誰でも・どんな団体も参加できるということではない。せっかくイベントはあるものの間口を広げることは難しい。各地区のコミュニティ活動が活発になればと思う。
- ・町会活動に若者が参加しない原因は、意欲の欠如ではなく、アクセスする手段がわからないというところが大きい。募集方法を工夫することで参加者は増える。例えば「半纏を貸すにはここにフォームを用意して、ここに登録すればできる」というように募集をしたら70人が集まった。広報や参加しやすい仕組みづくりにはまだ多くの可能性があり、世代間の意識差を埋める工夫が重要と考える。

- ・ 神田地域の町会には住民が少ないところがあり、さらに高齢化しているという中で開発が進んできて、割と若い新入社員の方が増えてきている。そういう人を神田祭に呼び込みたいという目標があり、神田錦町大歓迎会を開催することとなった。町会の立場としては企業と交流することでお祭りが若返ってきていることやご近所さんと挨拶ができるようになったということが非常に評価されていると思う。
- ・ 麹町では新しく越してきた子育て世代向けにイベントが増えているが、子育てが終了している既存の住民には関係がなく、町会への参加には繋がりにくいのが現状である。ラジオ体操など地道な活動で顔見知りになることはあるが、町会加入までは距離がある。新旧住民のイベントが分離すると二極化が進むため、双方が交流できる仕組みづくりが必要ではないか。地域の歴史や知識を共有する場など、融合を促す工夫が求められている。
- ・ 町会員を増やすために、「家族ぐるみの食事会」を行った。夕方に一次会を行い、終了後は男性陣に子どもを連れて帰宅してもらい、女性の方には二次会をお願いした。その際、カンパを募り、女性同士でグループLINEを作ってもらうことで情報を共有した。男性経由では情報が止まるが多いため、女性のネットワークづくりが重要だと思った。また、神田祭は町会参加のきっかけになるが、2年に1回と機会が少ないため、盆踊り練習会を年5～6回開催し、家族で楽しめる場を提供した。こうした取り組みで、夫婦双方が町会に親しみをもち、将来的に子どもも参加しやすくなる環境づくりを目指している。
- ・ 自身が加入している町会では、マンション住民として町会に参加したことがなく、案内も届かないため情報を得るのが難しい状況である。掲示板が遠く、イベント情報を見逃しやすいことが原因で、参加機会を逃している。子育て世帯など、参加したい人が情報不足で関われない可能性があり、町会側の情報発信方法に改善の余地があると思う。
- ・ 町会に入らないと回覧板がまわらなかったり、町会員がポスティングによりイベントの告知をしたりする状況である。若い世代はスマートフォンにより横断的な情報発信を行っているため、PR方法の検討が必要である。

(3) 昼間人口（在学・在勤者）との交流促進

①区民と在学・在勤者の交流機会を創出し、地域コミュニティの活性化を図る。

②昼間人口が地域活動に参画しやすくなるような仕組みを構築する。

(提言の背景)

- ・ ボランティアセンターは、ボランティアを必要とする人や団体と、活動したい人や団体を繋ぐコーディネート機能を担っている。千代田区内外のNPOやボランティア団体、企業、大学などと協働して活動しているという特徴がある。支援対象は区民や千代田区の福祉施設だが、活動する人は区民に限らず幅広く参画いただいている。人口規模が小さい千代田区では、昼間人口（企業・学校）を活用し、在住・在勤・学生・NPOなど多様な人材や組織を巻き込むことが重要と考えている。
- ・ 神田錦町大歓迎会に参加した学生や組織では、就職活動や企業訪問以外でリアルに働いている会社員の方と話す機会は貴重な場という意見があった。また、悩みとして学生団体が活動する上で活動資金不足や場所の問題があり、サポートがあると良い。

- ・参加企業としては地域の方に対して自社製品を見てもらい、反応を直接聞くことが出来る。神田錦町はオフィス街のイメージだったが、地域の方と接することでイメージが変わった。
- ・今回のイベントは企業の参加が増えたことで規模が大きくなり、良い面もある一方で、町会からは「もっと小規模で深い交流が望ましい」という声もあった。企業同士の繋がりだけでなく、錦町ならではの魅力を打ち出すことが重要であり、神輿や獅子舞、地元店舗や神社のブースなどを通じて地域への愛着を高める工夫が行われた。結果として、ビル内でも「まち」を感じられるイベントになったのではないか。
- ・社会教育や生涯学習における企業との連携は、これまでほとんど事例がなく、研究発表も見られない。学校教育では企業連携が進み、大学と企業の協働も当初は利益追求への懸念から批判されていたが、現在は一般的になっている。一方で、社会教育分野では企業連携を好ましく思わない傾向が強く、未開拓の領域といえる。
- ・千代田区民ではなく、錦町二丁目の企業に勤めて9年になる。関西出身で地域との縁はなかった。不動産会社主催の開発説明会に参加したことがきっかけで町会と接点を持つようになった。説明会では、企業が丁寧に地域と対話している姿勢に住民が好意的であることを知り、地域の危機感や課題を感じた。その後、居酒屋で偶然町会青年部と知り合い誘われたことがきっかけで、町会活動に参加するようになった。神田祭や流しそうめん、ご縁日などのイベントを通じて顔見知りが増え、地域の繋がりが広がる楽しさを実感している。「知らないから参加できない」ことが課題だと思っている。神田祭でたくさんの写真を撮り、神田スクエアで写真展の開催を予定しているので、こうした企画で魅力を伝えていきたい。町会は人手不足なので、外部の人が参加しやすくなるような役割を担いたい。区の施策は良いものが多いものの、情報発信が届きにくいと感じている。SNSなどを活用し、身近に情報が届く仕組みが必要だと思っている。
- ・佐久間町四丁目町会では、新しく建ったマンションの住民が町会に参加してくれている。企業にはどのように告知していけば良いか。社員3人のようなこじんまりした企業が多いので、どのように関わることができるか、興味を持ってもらえるか検討している。企業の方に参加してもらえると、活動の幅が広がると考えている。
- ・企業側からすると、「参加してもいいよ」、「立ち寄ってもいいよ」というように開かれたものがあると参加しやすい。
- ・年に一度の綱引き大会や流しそうめんなど、企業や地域の人と一緒に楽しむ機会は、町会に触れるきっかけになる。無理に勧誘するのではなく、自分自身が楽しむ姿を見せることで「楽しそうだから参加したい」と思ってもらうことが効果的である。具体的な体験や楽しい雰囲気が、自然な繋がりを生み出す鍵となっている。

5. 社会教育人材の育成支援と

活躍機会の拡充

■現状と課題

令和7（2025）年3月の中央教育審議会生涯学習分科会「社会教育の在り方に関する特別部会の審議事項1に関する意見の整理」では、「地域コミュニティの基盤を支える社会教育の在り方として、学びを通じた『人づくり・繋がりづくり・地域づくり』の循環が、地域全体のウェルビーイング（肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること：世界保健機関憲章）の向上」に繋がるとしている。これまで1～4に述べた提言をふまえて、共生社会の実現や世代間の交流を念頭に置き、地域コミュニティの基盤を支える社会教育人材の育成支援および活躍機会の拡充に向けて、千代田区としてどのような取り組みが可能であろうか。今後、千代田区としては社会教育主事や社会教育士の養成課程をめぐって想定される文部科学省の改正の動きを注視する必要がある。

千代田区では、社会教育人材の育成支援と活躍の機会拡充に向けて、さまざまな仕組みや事業が展開されている。生涯学習館では、教養講座や区民自主企画講座、異世代交流事業など、多様な分野で社会教育人材が活躍できる場が用意され、区民が自ら講師となる「人材バンク活用講座」や、区民自主企画講座など、住民自身が学びの担い手となる仕組み、「ちよだ生涯学習カレッジ」や「バウチャー制度」など、学びたい人・教えたい人の双方を支援する仕組みも導入されている。

人材の多様化・裾野拡大、体系的な育成・研修、活躍の場のマッチング、情報発信・アウトリーチ、モチベーション維持と評価などの課題が多く、今後は、誰もが社会教育人材として活躍できる柔軟で多様な仕組みづくりと、持続的な人材育成・支援体制の構築が求められる。

たとえば区内の町会や地域行事、ボランティア活動など、地域社会の中でも社会教育人材の活躍が期待される機会が増えているが、担い手は、50代・60代を中心とした中高年層が多く、若年層や多様なバックグラウンドを持つ人材の参画が十分ではない。

■提言

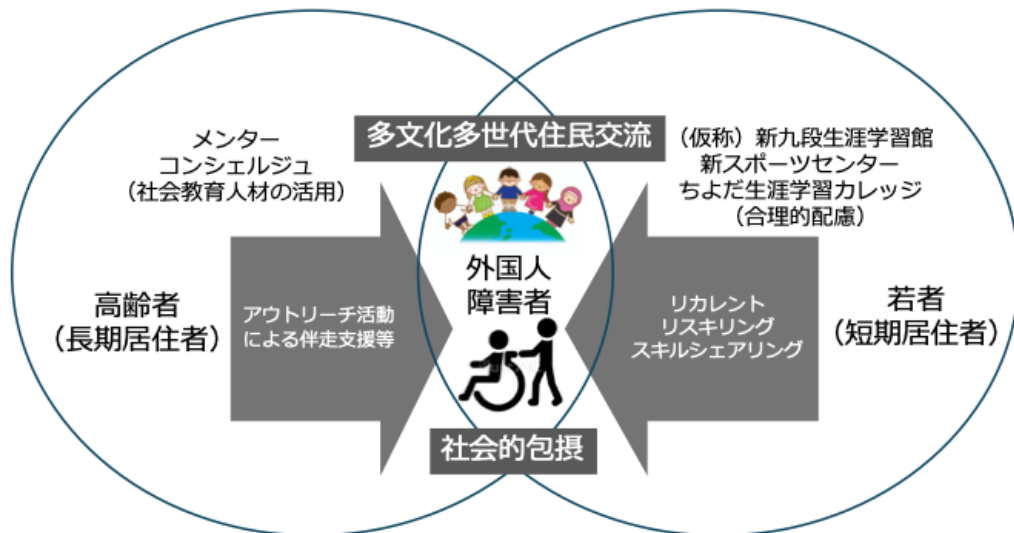
これまでに提言した事項を具体的に進めるためには、地域における多様な主体をつなぎ、学びと実践を支える社会教育人材の存在が不可欠である。現状では、個別の講座や実践は行われているものの、体系的・継続的な育成プログラムとして十分に整理されておらず、育成や研修の面で課題がある。また、社会教育人材の募集や活躍の機会についても、情報が十分に行き渡っているとは言い難い。

世代間交流の観点から見ると、高齢者は福祉的な視点により「支援される側」として捉えられがちであるが、今後はその人生経験や知識、人的ネットワークを生かし、「支援する側」として地域活動に参画し、若い世代との交流を担ってもらふ視点が重要である。人生経験豊かな高齢者が、若者や社会参加

の機会につながりにくい状況にある人々に対し、メンターやコンシェルジュとして寄り添い、ともに考え、歩む伴走型の支援を担う仕組みが期待される。

今後は、図に示すように、多様な住民が自然に参加・参画できる仕組みを構築し、多世代が共通して関心を持てるきっかけを通じて、相互の学びや交流が循環していく環境を整えていくことが求められる。

以上をふまえ、本提言では、社会教育人材の育成および活用に関し、以下の取組について提言する。



千代田区における多文化多世代交流のイメージ図

(1) 千代田区における社会教育人材の育成

- ①高齢者をメンターやコンシェルジュとして活用する伴走型支援の仕組みを検討する。
- ②学校・地域を繋ぐコミュニティ運営と人材配置を強化する。
- ③地域課題に向き合う社会教育人材を育成するための学習・活動の場を提供する。

(提言の背景)

- ・現役を引退した高齢者が、持っている知識を活かし、社会的に排除されている障害者・外国人・若者にとってのメンターやコンシェルジュなど伴走支援者として活躍してもらおう。そのために、(仮称)新九段生涯学習館などでこういった学習が行われると良いのではないかな。
- ・千代田区の小・中学校では昨年度から全校にコミュニティ・スクールを設置することとなり、年に2回程度集まって情報交換を行っている。地域力が強いところとそうでないところの活動内容や盛り上がり方に差がある。働き方改革で教員の超過勤務の問題も出てきており、教員が主導することは難しい。学校は、子どもたちを経て家庭や地域へ活動を繋げる拠点をしては非常に良いが、活動を広げていく上でコミュニティの運営やマネジメントを各所に配置することが今後発展する上で課題になると思う。
- ・ボーイスカウト活動は学校単位にとどまらず、地域や世代を超えて参加することができるもので、卒業という区切りがないため同じ仲間と継続して活動を続けることができる。活動の本質は特定のゴー

ル達成ではなく、状況を分析し、自ら考え計画し行動する力を養うことにある。指導者は見守りつつ、寸劇などを通じて行動のヒントを与える。日本のボーイスカウトの目的は「よりよき社会人の育成」であり、リーダーシップ、フォロワーシップ、ボランティア精神を重視する。これらの経験は地域活動に波及し、元メンバーが町会やイベントで中心的役割を担う事例も多く、地域社会への影響は大きい。課題として人材を育成するための人材の勧誘が挙げられる。現状では、学校・学童や地域の行事に協力するかわりに宣伝させてもらうことで、人員を増やしているが、組織拡張をすることが難しいことを痛感している。

- ・社会教育人材をどのように育成していくのか。社会教育士や社会教育主事の資格を持っている方がいるものの、活躍の場は少なく資格を活かせていない人がいる。
- ・社会教育の担い手として生涯学習活動に関わられている方や町会に関わられている方の後継をどうやって育成していくか、若い人たちをどう取り込んでいくかが課題である。
- ・社会教育主事養成から社会教育士養成に移り変わる中で、資格取得に向けてどのように発信していくのか。今まで実習を行わなくても資格取得をすることができたが、施設での実習が義務付けられたため、教育機関から要請があった場合は区として対応してかなければならない。
- ・千代田区の場合は町会が非常にフレキシブルな考えを持っているため、町会の後継者、地域行事の後継者を在勤者も含めてどのように育成していくか。これは、社会教育人材の育成にもなる。
- ・将来の町会や地域の担い手として、子ども会の活用が挙げられる。地域行事に参加していた子どもが将来的に地域に戻ってくるという観点から、非常に大切な取り組みであり、継承していくことが大事である。
- ・社会教育コーディネーターや生涯学習コーディネーターという名前はあるものの、機能していない。有効活用するためにちよだ生涯学習カレッジなどで地域の資格として付与し、しっかり育成・活動することができるような方向に持っていくべきである。
- ・社会が目まぐるしく変化する中で非常に課題が多くなってきている。こうした課題に向き合うための人材を育成していかなければならず、社会教育士の育成がこれに該当する。

(2) 資格保有者や地域人材の活用

①ボランティアの有償化や施設利用優遇などのインセンティブ制度により

継続的な人材の確保を図る。

②企業ボランティアや学生ボランティアを地域活動に組み込み、世代間交流を促進する。

③地域ニーズへ適切に応えることが出来るように人材バンクの機能を強化する。

(提言の背景)

- ・千代田区の特長として、昔からの住民は仲間意識が強く、新規住民が入りづらい傾向がある。区に携わる様々な方々がこのような壁を取り払い、旧住民と新住民を繋ぐ役割を担えたらいいと思う。
- ・無償のボランティアだと継続して関わってもらうことが難しい。毎月来ていただけるような方は有償として来てもらったり、交通費を渡したりすることで手を挙げやすくなると思う。
- ・人材バンクがしっかり機能すれば色々な部活動の支援などもできるのではないかな。

- ・スポーツ推進委員は地域住民や地域団体に対してスポーツを推進する役割を担っており、千代田区ではスポーツ大会やイベントを企画して参加する方は多岐に渡っている。今後もスポーツを通じて地域住民の交流が活性化され、引き続き健康的な生活を営む手助けになればと思う。
- ・区民体育大会では審判やサポーターとして大学生に協力してもらっていて、世代間交流の場にもなっている。時代を担う若い世代が地域イベントに関わることで、地域に関わる大切さに気付くことが今後の地域交流活性化に重要だと考える。
- ・社会人になると会社での兼業が認められないことにより、退任してしまうことがあった。兼業が認められない企業が多いので、働き盛りの世代のなり手確保が困難である。
- ・ボランティアセンターの取り組みで、介護保険サポーター・ポイント制度がある。65歳以上の区民の方が活動の主体となって高齢者施設でボランティア活動をしてもらい、1年間8,000円分を上限としたポイントを貯めることができるものである。高齢者がスタンプをもらうことを楽しみに活動することで、継続した社会参加・健康づくりに繋がっている。
- ・企業ボランティアや学生ボランティアの特徴として、人の入れ替わりが多いことが挙げられる。そういった面では、区民のほうが続いて続けていただける。
- ・地域貢献すると家賃補助を出して千代田区に住みやすくするような制度があると、家賃が高く住むことができない若い世代を呼び込みボランティアへの参加を促進することができるのではないかな。
- ・退職して地域デビューをすることは、地域との繋がりが無い状況では難しい。
- ・若い世代のボランティアが高齢者の送迎をすることで、スポーツ施設を無料で利用できたり、区民講座を無料で受講できたりするような制度があれば若い世代のボランティア参加を促進し、かつ世代間交流にも繋がるのではないかな。
- ・小・中学生の頃から一緒に合唱活動をしていた子どもたちが、大学生や社会人になって、区のイベントにスタッフとして参加した。抵抗なく積極的に参加してくれ、小さいころから地域の活動に関わることの大切さを感じた。
- ・体育館など区の施設を利用している団体の方にボランティア参加を促すようなPR活動をしてはどうか。お手伝いしてもらいかわりに施設利用料を1回無料にしたり、優先的に予約したりすることができるとういんういんの関係で上手くいくのではないかな。
- ・区のスポーツ施設利用者は多く、プロのスポーツ選手もボランティア活動を行っているため、スポーツ関係者の協力ハードルは低いと考えられる。そこで、施設利用団体にボランティア参加を促し、障害者も楽しめるユニバーサルスポーツ（例：ボッチャ）への協力を依頼し、代わりに施設利用料の免除などインセンティブを設けることは双方にメリットがあると指摘されている。
- ・千代田区には企業と地域を結ぶ「千代田企業ボランティア連絡会」があり、87社、1,313名が登録している。令和6年度（2024年）は高齢者施設の見学、児童発達支援施設との交流、福祉まつり参加、サンタクロース訪問などを実施しているようで、千代田区ならではの企業との連携を考えても良いのではないかな。
- ・神田錦町二丁目町会の青年部の方のような方がメンターやコンシェルジュとなっていくことを支援するような仕組みを千代田区の中のでつくることができると良い。
- ・PTAでは、役員の時に築いた関係によって、人生のステージ変化とともに再度地域活動に戻ることができる。短期的な協力で終わらせず、長期的に交流することができている。

おわりに

第15期生涯学習推進委員会議の提言「住民交流の促進に資する千代田区の生涯学習・社会教育」は、区における「異なる世代や文化が持つ知識や経験の共有」が、「社会関係資本の再構築」へ、ひいては「千代田区の地域コミュニティ全体の持続可能性を高めること」に繋がることを期待するものである。したがって、「3つの論点」—①共生社会の実現、②人材の育成と施設、③世代間交流—をもとに、「考察の視点」としては、1. 社会人のリカレント教育への取り組み、2. デジタル社会への対応、3. 共生社会の実現と社会的包摂の視点、4. 世代間交流の促進とアウトリーチ活動、という4つの柱が設定され、それらを前提とした5. 社会教育人材の育成支援と活躍機会の拡充、にまで言及する、相応の領域をふまえたものとなった。

それぞれの項目は、「現状と課題」を確認し、それに基づく「提言」および会議での意見を「提言の背景」として示す構成となっている。詳細は本文にゆだねるが、ここでは、各項目の「提言」の要点のみ、重要性の確認という点で、あらためて挙げておきたい。

「1. 社会人のリカレント教育への取り組み」、においては、①働く若い世代が参加しやすい講座の時間帯やオンライン化・アーカイブ配信などの実施方法を見直すこと、②利用率の高いSNSやアプリを活用して積極的に情報発信すること、③若年者の参加を促すしかけと学びを続ける仕組みの構築、④これらを具体的に進めるためにアンケートやヒアリングにより若年層ニーズと分析を行うことを提言した。

「2. デジタル社会への対応」、においては、デジタルデバイド（情報格差）の解消や、誰もがデジタル化の利便性を享受できる環境整備のために、①高齢者・障害者への支援としてボランティアや学生が持っているスキルを活かしたデジタルスキルシェアリングの活用、②イベントやボランティア情報のデジタル情報提供、デジタルを利用したポイント制度・キャッシュレス決済の導入を提言した。

「3. 共生社会の実現と社会的包摂の視点」、においては、障害者、外国人、若者など多様な背景を持つ人々の交流や社会的包摂が求められるなか、①国際交流協会のような組織的な支援体制の整備、日本語・日本文化の学習機会の提供や防災情報の多言語発信および宗教的・文化的配慮など、共生社会の実現に向けたサポートシステムの構築、②障害者に対する合理的配慮、障害者の交流と参加・参画を促す仕組みの整備について提言した。

「4. 世代間交流の促進とアウトリーチ活動」においては、日常交流することが少ない高齢者と若年層が交流することの意義を共有した上で、①事業やイベントがさらに活発化するように、多世代に向けて参加のきっかけをはたらきかける、②区内各地域の特色をふまえつつ、町会への加入やイベントへの参加ハードルを下げる方法を考える、③在住・在勤者が参画しやすい交流機会を創出し、コミュニティの活性化を図ることを提言した。

1～4の提言を実現するための「5. 社会教育人材の育成支援と活躍機会の拡充」においては、文部科学省が意図する社会教育人材の育成を背景に、①千代田区では高齢者をメンターやコンシェルジュとして活用する伴走型支援、学校・地域を繋ぐコミュニティ運営と人材配置の強化、地域課題に向き合う

社会教育人材を育成するための学習・活動の場を提供する、②ボランティアの有償化やインセンティブ制度による継続的な人材確保、企業・学生ボランティアの地域活動への組み込み、人材バンクの機能を強化して資格保有者や地域人材を活用することについて提言した。

1. 2. は今回の考察の前提としての意味を持つ。さまざまな事例の紹介やヒアリングの実施は、4. や、今回のテーマの「副題」である「長期居住者としての高齢者と短期居住者としての若年者の世代間交流も視野に入れて」に通ずる。また、3. は、今回の提言の重要な基底といえよう。「提言書」の最後に位置付けた5. は、「はじめに」でも指摘されているように、現在検討されている第12期中央教育審議会生涯学習分科会の議論ともかかわる。すなわち、同分科会では、「社会教育人材を中核とした社会教育の推進方策」について議論されており、その柱の一つは、「若年層を中心に社会教育への関心や参画を広げる工夫」が挙げられている。

これらの提言をまとめるにあたり「千代田区の年齢別人口」をはじめとする多様なデータの提供があったこと、各委員自身が関わる活動の紹介と共有を行い意見を交わしたこと、部内や関係団体における具体的な活動—「国際平和・男女平等人権課」による『ちよだイズム倶楽部について』や「千代田区社会福祉協議会高齢者活動センター」による『千代田区社会福祉協議会における多世代交流の取り組みについて』—の紹介があったこと。これらは、委員の確かな議論を支えるものとなった。くわえて、「地域住民へのヒアリング」が行われたことにも留意したい。さきの「ちよだイズム倶楽部」の参加者への質問紙調査や「神田錦町大歓迎会」でのインタビューは、前田会長や事務局スタッフが自ら足を運んだものであるが、そこでは、あらためて「町会」の意義—多様な「町会の機能」—などが再確認でき、企業や大学関係者といった若者の地域交流への参加を促進するための方策の検討を含めて、学び合うコミュニティの実現に向けて貴重なものとなった。

こうした、区民の実際的な意見をふまえた各委員の具体的な意見を、「提言の背景」として付記した『提言書』が千代田区の生涯学習推進に寄与できれば幸いである。

参考文献

- ・ 菊池美代志 (1973) 「居住空間と地域集団」、倉沢進編『社会学講座第 5 巻 都市社会学』所収 127-150 東京大学出版会
- ・ 厚生労働省政策統括官付参事官付 雇用・賃金福祉統計室 (2024) 「雇用の構造に関する実態調査 (若年者雇用実態調査)」
(http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/#list07_02.2026 年 3 月 13 日閲覧)
- ・ 厚生労働省 (2025) 『令和 7 年版厚生労働白書 (令和 6 年度厚生労働行政年次報告)』 「次世代の主役となる若者の皆さんへ 一変化する社会における社会保障・労働施策の役割を知る一」
(<https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/25/index.html> .2026 年 3 月 13 日閲覧)
- ・ 千代田区(2013) 「地域コミュニティ施策の一元的な推進に向けた検討における区民アンケート調査報告書」
(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/10671/sankaku-06.pdf>,2026 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 千代田区(2022) 「千代田区人口ビジョン」
(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/31446/r3vision.pdf>, 1 月 8 日閲覧)
- ・ 千代田区(2022) 「共生社会をめざす『千代田区のよかったこと』調査報告書」
(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/27935/hokokusho.pdf>,2026 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 千代田区(2022)第 13 期提言「コロナ禍の生涯学習推進における ICT の活用と支援の可能性」
(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/1237/13hokokusho.pdf>,2026 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 千代田区(2024) 「千代田区住宅白書」
(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/7040/r6hakusho.pdf>,2025 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 千代田区(2024) 「第 51 回千代田区世論調査」
(<https://www.city.chiyoda.lg.jp/documents/32525/yoronchosa51-03.pdf>, 2025 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 内閣府孤独・孤立対策推進室 (2025) 「人々のつながりに関する基礎調査」
(https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/zenkokuchousa/r6/pdf/tyosakekka_gaiyo.pdf,2026 年 1 月 9 日閲覧)
- ・ 日本社会教育学会編 (2006) 『社会的排除と社会教育(日本の社会教育 第 50 集)』 東洋館出版社
- ・ 日本 WHO 協会「世界保健機関憲章とは」
(<https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/>,2026 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 文部科学省(2022) 「生涯学習に関する世論調査」
(<https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-gakushu/>,2026 年 1 月 9 日閲覧)
- ・ 文部科学省国立教育政策研究所(2022~2024) 「共生社会の実現を推進する社会教育とボランティアに関する調査研究報告書」
(https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pf_pdf/20250627.pdf,2026 年 1 月 9 日閲覧)
- ・ 文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会(2024) 「第 12 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理ー全世代の一人ひとりが主体的に学び続ける生涯学習とそれを支える社会教育の未来への展開；リカレント教育の推進と社会教育人材の養成・活躍のあり方ー」
(https://www.mext.go.jp/content/20240712-mxt_syogai03-000037073_2.pdf,2026 年 1 月 8 日閲覧)
- ・ 文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会社会教育の在り方に関する特別部会(2025) 「審議事項 1 に関する意見の整理」
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/015/toushin/mext_00005.html, 2026 年 1 月 8 日閲覧)

会議開催経過

開催回	開催日	主な議題
第1回	令和6年6月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・委員自己紹介、事務局紹介 ・会長および副会長の選出 ・第14期千代田区生涯学習推進委員会議「提言」について ・生涯学習推進委員の役割と第15期の会議予定 ・第15期千代田区生涯学習推進委員会議テーマ（案）について
第2回	令和6年9月19日	<ul style="list-style-type: none"> ・第15期千代田区生涯学習推進委員会議の進め方について ・前田会長基調講演「住民交流の推進に生涯学習が果たす役割」 ・千代田区の現状・生涯学習について
第3回	令和6年11月28日	<ul style="list-style-type: none"> ・今期のテーマに関する3つの論点について ・各委員の参加事業・活動について ・関連団体（施設）へのヒアリングについて
第4回	令和7年2月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・千代田区における世代交流の促進について ・千代田イズム倶楽部について（国際平和・男女平等人権課） ・千代田区社会福祉協議会における多世代交流の取り組みについて（千代田区社会福祉協議会）
第5回	令和7年5月16日	<ul style="list-style-type: none"> ・第4回会議での質問について報告 ・第4回までの意見まとめ報告 ・第15期開催スケジュール（案）について ・地域住民へのヒアリングについて
第6回	令和7年7月31日	<ul style="list-style-type: none"> ・ちよだイズム倶楽部アンケートについて ・神田錦町二丁目町会の取り組みについて ・提言骨子（案）について
第7回	令和7年9月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・第15期生涯学習推進委員会議の提言書作成に向けて（今後の方向性の提示と確認） ・提言書の目的・位置づけと枠組みの提示
第8回	令和7年12月11日	<ul style="list-style-type: none"> ・提言書（素案）の確認について
第9回	令和8年3月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・提言書の報告

資料1 ちよだイズム倶楽部受講生への調査

※調査方法：受講生16名に対してアンケートURL（マイクロソフト・forms）を送信し7名から回答を得た。

※調査日時：令和7年6月7日

年齢(歳)	住居・勤務(在学)先	住居が千代田区の場合の居住歴(年)	「ちよだイズム倶楽部」に応募・参加した動機は何ですか？	「ちよだイズム倶楽部」に参加して良かったことは何ですか？	「ちよだイズム倶楽部」に参加して物足りなかったことは何ですか？	区では世代間の交流を促す学習講座やイベントを検討しています。あなたはどのような講座・イベントがあったら良いと思いますか？
31歳	住居が千代田区	2年	2024年度に区政モニターを務めており、その関係で案内がありました。日頃から女性の地位向上、地域活性化に興味があり、参加を決意いたしました。	地域活性化に参加するきっかけになったこと。同じ思いを抱く方と出会えたこと。	活動案を定めてから企画発表会までの時間が急にタイトでスケジュールの余裕が無いこと。	地域で活動をしている方々のきっかけや軌道に乗せるまでのお話を伺えるイベント。
32歳	住居が千代田区	3年目	千代田区で実現したいことを応援する支援者になりたいと思ったから。	千代田区にかかわる方々の様々な思いを知ることができたこと。自分より若い方々との関わりが持てたこと。	参加者によってモチベーションやちよだイズムに対する思いが異なっており、チームのパワーが不均一だと感じたこと。	千代田区で頑張っている中小企業の社長さんとお話を伺うイベントがあると嬉しいです。ビジネス街ではあるものの、大企業が目立ち、どのような中小企業があるのか知る機会がこれまで少なかったためです。また、千代田区には学校がたくさんあるので、企業と学校を結び、社会を学べる場の提供ができると良いなと思いました。
30代	住居が千代田区	6年	広報誌から興味を持った為	若く新しいことに取り組みたい方々と繋がる事ができた	ちよらぼさんのように長期契約で、活動支援をしてもらいたかった	匿名(ニックネーム)で参加でき、トレンドにのった学習講座やイベント(匿名で学習講座やイベント希望を募る)があるとより参加者は増えると思います！
21歳	住居が千代田区	2.5年	千代田区の国際事業に参加して、担当の方にこのイベントをご紹介いただき興味を持ったから	千代田区で活動している色々な方と交流できるから	なし	国際交流イベント
20歳	住居が千代田区	3年	地域の若い方とのつながりを増やしたかった。仕事とは関係なく楽しみながら実施できる企画を試みたかった	知り合いが増えたこと	駆け足すぎたのでもう少しじっくり進めていきたいと感じた	20代、30代などの若い人が参加できる楽しいイベント
30歳	いずれも千代田区	2年	桜日和、山森さんからのご紹介	グループメンバーとの出会い。セミナーを聞いたこと。	特になし	無回答
36歳	いずれも千代田区	3年	千代田区内で交流できる機会が欲しかった。社会活動に興味があった。	社会活動に取り組んでいる。交流できる機会も今後増えていくのではないかと感じている	グルメ系、外国人との交流(英語)、ゴルフなど自分の趣味を絡めた交流はなかなか難しそう	グルメを一緒に楽しむ、地域の外国人を巻き込んだイベント。千代田区内のおもしろいスポットを皆で一緒にまわってもらい上げるイベントなどがあれば参加してみたいです

資料2 神田錦町大歓迎会における半構造化インタビュー

注：インタビューは約1時間30分行った。ICレコーダーで録音すること、録音した記録についてはプライバシーに十分配慮した上で提言書執筆に用いる予定があることについて許可を得た。

※調査方法：イベント当日に現場にて対面で半構造化インタビューを行った。

※調査日時：令和7年7月4日

※調査場所：神田スクエアホール

1. 神田錦町二丁目町会

- ①イベントをはじめることになったキッカケを教えてください。
- ②イベントを始める前と後で町会にどのような変化がありましたか。
- ③イベントで特に印象に残ったコンテンツは何ですか？
- ④マンションにお住まいの方の参加はありますか？
- ⑤今後、町会としてどのような活動にしていきたいですか？

神田錦町二丁目 町会員

- ・4月になると各企業さんに新入社員が入る。そういう人に5月の神田祭に参加してもらいたい、神田を知ってもらいたい、お祭りを知ってもらいたいという思いから始めました。おかげでお祭りには若い人がだいぶ参加してくれた。かつての錦町は住んでる人も企業の人も年寄りが多く、町会と若い人の接点がなかなかなかったが、最近開発がされて大きなビルができて企業が増えて人が増えました。なにしろ我々にとっては神田に生まれて育ったので、神田祭に参加してほしいのが一番。最近は外国の人の参加もみられます。
- ・その結果、イベントや祭りで挨拶することが増えました。錦町がどんなところかも知らない人が多いので、せっかく自分が勤めている場所なので知ってもらいたいというのが各町会の共通した思いです。
- ・マンションへのポスティングもしているので、参加は増えてきました。町会員でなくても参加してくださいとお願いしています。特にお祭りには参加が増えました。
- ・企業さんと住んでいる人、勤めている人と住人の接点を増やしていきたい。7月にはそうめん流しをやりますが、接点を広げていきたいと各町会で話しています。せっかく神田に勤めているので特色を知ってもらいたい。新しく来た方にはずっと居てほしいとは思いますが、引っ越されてもまた来たいなど思えるまちにしたい。
- ・特別に若い人にこだわりはなくて、会ったら挨拶を日常できる町でありたいです。新しく喫茶店ができたのですが、土日もありますって・・・、土日には人がさっぱりいませんでしたから、人が来ないだろうと思ってたら、土日にベビーカーでお子さんを連れている人で混んでいる。続けることが大事で、企業さんにおんぶにだっこではなくて、町会も予算を使い我々もやりますという立場で、企業さんに協力いただいています。
- ・千代田区はどこでも安全で、交通の便が良い。女性が夜一人で歩いても安全です。でも税金が高いので家賃も高くなってしまふ。町会に所属すると補助が出るようですし企業の方も補助があるところ

ろもあるようです。

神田錦町二丁目 町会員

- ・この地域は神田祭が一番のコンテンツですが、2年に1回しかないし、人事異動もあって企業と町会の交流が途切れてしまう、そこをなんとか繋げられないかと、お祭りの間にも交流イベントを持ちたいというのがキッカケです。去年は歓迎会として新しく来た社会人や学生さんが地域に溶け込めるようなコンセプトでしたが、今年は企業同士も含めた交流を企画しました。主催企業さんが柔軟なので、企業さんも繋がりがやすいと思います。
- ・多少なりとも町会に入ってくれる企業、在勤で町会に入ってくれる人が増えましたので、効果はあったと思います。それぞれの町会は人数が少なく、人も予算も町会単位でしか動けない部分があるので別け隔てなく町会で協力して一緒にやりましょうというスタンスです。町会内で実施について反対はありませんが、準備不足などのご指摘はあります。
- ・今日は、区長さんも1時間以上いてくれて、まちづくりのお話をしてくれたのがありがたい。上の世代は閉鎖的な部分があったと思います。町会の上層部は神田祭ありきだよと言われますが、その上でやることには問題ありません。今はどうぞやってくださいという雰囲気になっています。町会の年齢も青年部でもギリギリで40~50代。40代前半の世代が中心だとイベントはやりやすいです。
- ・前回もイベント以降マンション住まい3、4人の方が町会に入ってくれました。お祭りに参加したいのが狙いかもしれませんが、このイベントも効果があると思います。
- ・今後は小さいイベントでもいいので、お祭りとお祭りの間にやっていきたい。まだまだ在勤の方でノータッチの人も一杯いるので、増やしていきたい。神田公園地区の他のエリアでは前から色々イベントをやっていましたが、錦町にはそういうイベントがなかったので今回の企画になったと思います。

2. 主催者・参加企業

- ①イベントを通じてどのようなビジネスチャンスやメリットがありますか？
- ②イベントで特に印象に残ったコンテンツは何ですか？
- ③町会や地域の企業や団体との交流を通じて新たな発見はありましたか？
- ④今後、神田錦町エリアでどのような活動や関わりを持ちたいですか？

参加企業 女性

- ・自分たちのやっている事業が社会のどういったところにニーズがあるのか、例えば教育について調査させてもらうことも大きなメリット。その延長で仕事の繋がったりきっかけができたりすると良いです。
- ・ある企業さんのブースですでに3,000人の会員がいるそうで、とても勢いがあると思いました。
- ・運営している大人が元気なので子どもにも繋がっていくと思う。

参加企業 女性

- ・幅広い年代の方に製品をみてもらい、触ってもらうことでコミュニケーションがとれます。神田に会社があって神田はビジネスパーソンが多いイメージでしたが、実際にこういった場に来てみると皆さん優しく、話しかけてくれたりするので、ガッツリ会社っていうイメージから優しいまちのイメージに変わりました。
- ・ちょっとしたイベントでもいいので、この製品（電子黒板）に触れてほしいなと思っています。自分も旅行したりしたときにスマートフォンをよく使いますが、こういったちょっと新しい体験もしてできる場をつくりたいです。

参加企業 25歳男性

- ・もともと働いていた会社がこのビルにあって、その時は早稲田に住んでいて、ちよだプラットフォームスクウェアのシェアオフィスにお世話になって引っ越してきました。自分は小金井市や新宿区など引っ越しを繰り返して来て、ここ1年ぐらい錦町に住んでいます。一つ思うのは、ホームタウンというかコミュニティに根つきやすい気がします。不動産会社さんも地域に根付いた活動をしているので、まちなかで会う人とただすれ違うのではなく、「こんにちは」ってあいさつできるところが良いと思う。ここ1年でお祭りやイベントに参加して顔見知りが増えて繋がりが増えたのもっと増やしたい。
- ・展示ではまちづくりのイラストが気になりました。自分もまちに対して思うところがあるので。錦町にはいろいろなイベントがあるし、大企業もたくさんあるけれども、スタートアップ企業もあるので、そこにフォーカスしたイベントがあっても良いと思う。
- ・個人的に一番興味があって、ちょっと特殊な自転車（カーゴバイク）を個人で輸入しています。馬喰横山で飲食やってる親戚が2〜3キロの運搬に車を使うのはコストが無駄と聞いて、そういうところにカーゴバイクが使えるのではないかな。売ったり貸したりできるといいと思う。千代田区のシェアサイクルに混ぜてもらったりできないかな。どういう人にヒットするのか見ていきたい。
- ・スポーツセンターに行くのと区の広報は絶対に読んでるので千代田区で色んな事業があるのは知っています。先日、金継ぎの講座があってやりたいなって思いました。学習講座には興味はあります。趣味がたくさんあるので色々やってみたい。料理にも興味があるので専門性の高い趣味講座があると良いです。自転車に関して溶接の技術が近場で学べるとやってみたい。

3. 参加者（新入社員・学生）

- ① イベントを通じて企業や地域住民との交流で得たものは何ですか？
- ② イベントで特に印象に残ったコンテンツは何ですか？
- ③ 今後、神田錦町でどのような活動やイベントがあれば参加したいですか？
- ④ 現在、あなたが取り組んでいる活動はありますか？

学生団体 20歳 男性

- ・いままで企業と学生という接点はありましたが、普通に働いてらっしゃる方と一緒に何かやるとか、リアルな社会人と知り合えたことが大きい。

- ・今回の展示では、まちの未来図の地図がわくわくして面白い。
- ・学生団体の中でのプレイヤーなので、自分は学生を連れていろんな場面に関わりたい。大学は千代田区内では明治、日大とか専修とか全体では20校以上の大学から70人ぐらい参加があって、今日はその人たちが知り合いを連れてきているので30人ぐらいいます。
- ・元は主催企業さんに協賛をもらっていたことがあって、こういうのをやりたいって言ったらやらせてくれて、街の人とか企業さんに通じてきました。自分は学生を集める立場なので、触れてもらうことに価値があると思っています。このイベントではこの場に学生を集めて企業さんとの繋がりを提供する目的でやってます。

学生団体 20歳 女性

- ・基本的に企業さんと一緒にやっている所以交流は多いです。就活生なので働き方とかを聞いたり、会社の特徴で気になっていること聞けるのが他の学生にはない体験。
- ・私達のイベントは申込み制で、自分たちの周りの友達が多く、地域住民の方との交流がありませんが、一回ファッションショーをやったときに街の人がふらっと見に来てくれたことがあります。古着の事をやってるので下北沢に住んでいる人は理解してもらえらるけど、知らない人には？のところがあって、まだまだと思う。
- ・展示では子ども向けのブースがけっこう面白そうだった。鎌倉出身なのですが、こういったイベントではなくて子ども同志のふれあいはいいなと思います。
- ・豊島区で古着回収ボックスというのを置かせてもらってるんですが、千代田区でも置かせてもらって、リメイクするとかを地域の施設でやってみたい。団体にはおしゃれな人が多くて、アパレル産業の社会問題や環境問題に関心があります。メンバーの中には障害者向けのファッションに関心がある人もいます。
- ・学生団体の多くは場所とお金がないことが多くて、バイト代を使って活動しているので、活動する場所があるととてもありがたい。今は青学の一室を使わせてもらってるのですが、回収した古着が集まりすぎて一杯で、販売が追いついていない状況なんです。
- ・今後は、企業さんと繋がれるイベントに興味があります。定期的に協賛できるような関係ができるといいです。

資料3 神田錦町大歓迎会について

※神田錦町二丁目町会青年部、令和7年7月31日、「神田錦町二丁目町会の取り組みについて」講演より

私は千代田区民ではなく、神田錦町二丁目にある会社に勤めて9年目の在勤者です。

現在は違う部署に移動していますが、昨年時点では総務に属しており、錦町の開発の説明会が開催される際に、弊社がテナントとして入っているデベロッパーであり主動されている不動産会社様よりご案内いただき、参加しました。

初めての参加で、錦町は比較的個人のお店があり歴史のある町だという印象を持っていたこともあり、大規模な開発については反対の方がほとんどなのは想定していたのですが、日頃から不動産会社の方が地域の方と接点を持っているからか、好意的な意見が多かったことが非常に印象的でした。

もちろんそうでない方もいらっしゃいましたが、好意的な意見の方が多く、「このような開発にあたり、こんなに丁寧に何回も説明される企業はないだろう」ということを住民の方が仰っていました。

大手町という大都会と神保町などの人が集まる町の間ですこしばっかり空いてしまう場所として取り残されてしまうのではないかという危機感を住民の方もお持ちで、具体的にいつできるのか、といった質問も出るほどでした。

これが私が一番初めに会社以外の町の方との接点であり、実際に町の方とお会いする機会でした。

その不動産会社様が毎年錦町で「ご縁日」というのを開催されており、企業対抗の綱引き大会も行われています。弊社もその不動産会社様の管理するビルにテナントで入っているためお声かけいただき出場していましたので、イベント開催などは知ってはいましたし、町の方も参加されていましたが、綱引きで試合をする以外に関わることはありませんでしたので、説明会終了後はそのまま帰路につく予定でした。

ところが説明会終了後、説明会会場の近くに昨年オープンしてオーナーとも仲良くなっていた居酒屋の前でそのオーナーと立ち話をしていたところ、町会の青年部のメンバーもオーナーと顔見知りで挨拶をすることになり、同じく説明会に参加していた青年部長も合流し、お互い直前に説明会に参加していたご縁で話が盛り上がり、その居酒屋でそのまま食事をしようという流れになりました。

その時はまさか自分が町会に入会すると思ってはいなかったのですが、これが、町に事業所があるだけの一社員の私が、町の方と接点を持つきっかけになりました。

先ほどのご縁日も開催はされているのですが、接点はなかなかない。たまたま私がこのような接点を持つきっかけがあったからこのように広がっただけなので、他の方も接点があれば関係が広がるのではないかなと思います。

数ヶ月後その青年部の方にお声がけいただいて町会に入るのでありますが、よくわからないままなぜか青年部にもなっていて。でもこういう関係性の構築が他の方もできるのではないかなと思っており、私がそういうモデルとしての立ち位置だと思っています。

この町に住んでいるわけでも町の歴史を深く知っているわけではないけれど、平日日中、町にこんなに人が来ているのに、ただ職場や学校に来て帰るだけというのもなんだか寂しいと思いますし、日頃ランチに出た時に行列のあるお店があったり、休日はすごく静かなのにどうやらイベント開催があり人が

集まっている時もある。なのに仕事をしにしかこの町に来ないのは、この町のことを知らないからだと思いました。それこそ9年も勤めにこの町に来ているのに、神田祭のことすら知らなかったのです。案内はあったのですが、そもそも参加できるものとも思っていないので他人事だから気にも留めていませんでした。情報や機会がなければ入っていくことはないですが、逆に情報が入ってきて、その輪の中に入っていいよと言ってもらえれば、入っていける機会自体は実はたくさんあるのだなというのが自分自身の気づきです。

私は企業の一社員として、ではなく私個人で町会員になっているのですが、その理由としてはまず弊社が会社として町会には入会していないことがあります。会社自体は本社は別地域にあり事業所は支店でしかないこと、またそこで私が窓口として会社に入会を勧めることを面倒だと感じてしまったことにあります。会社が町会員でその代表として自身が動くとなると、私は会社の意向のもとで動かなければならない。また自発的でない人を説いて引っ張り出すのも私の考えと何か違う。ですので私は、能動的に自発的にその輪の中に入ってみたいと思う人を増やすための動きをしたいと思っています。

このように町会に入ったのは、不動産会社さまの説明会に参加して町会の人と仲良くなった、がきっかけです。町は非常に狭い地域ですので、ランチなどで会社の外に出ると知っている方にお会いするんですよね。お疲れさま、と挨拶や会話したりするので、話が広がるのがとても楽しいなと思っています。

私たちの活動についてですが、私は昨年9月からということもあり、まともに参加したのは神田祭からで本当に短い期間なのですが、今回の参加にあたりヒアリングをしてきました。

町会として主催で行っているのは神田祭・総会・新年会。新年会には私も参加しました。その他の行事としては、錦町の4町会で先々週に実施した流しそうめん、先ほどの話にもありました不動産会社様と一緒にやっているご縁日・綱引き大会、今回の議題にありました大歓迎会、歳末の夜警などです。

これらについてですが、例えば神田祭の準備などは企業様も当たり前のように参加してくださっていますし、これは町会の方も特徴的だと言っていたことですが直会（なおらい：神社の祭典や神式の葬儀の後に行われる、神様にお供えした神饌（しんせん）神酒（みき）を神職者や参列者が共にいただく行事）にはこどもの参加が非常に多いのが特徴です。

地域が狭いこともあり、住民であるこどもの数自体はそんなに多くないはずなのですが、先ほどの議題で私自身が全く関係のない神保町のお祭りのお手伝いに行ったお話をしたのですが、近隣地域はお子さんのパパ友ママ友がつながっていて町会を超えて付き合いがあるので、直会にも参加があり、アットホームな会になっています。直後にまた会う機会があると顔見知りになりますし、次の機会の話題が出ることで話も広がります。

このように「この町会だから」と閉じた会ではなく、またそれがきっかけで別の町会にも顔を出す機会にもなります。例えば私が流しそうめんでお手伝いをしていると、「錦町に新しい人が入ったんだね、いいね」であったり「こうやって人手が増えるといいね」といった会話が広がり、「うちは来週人手足りないんだよね」「行きましょうか？」なんて他町会のお手伝いに行くことになったり。そこでまた顔見知りが増えると、これは青年部のメンバーが申しましたが、治安向上につながると考えています。お子さんがいても周りに知っている大人がいるとか、私は出身が田舎なので田舎がまさにそうなのですが、人の目が入るとするのは治安の向上や守っていくことになるなと感じました。

神田祭には初参加で何も知らない状態でできることもわからない状態だったのですが、お祭り自体が2年に1回であること、また町会のメンバーは皆作業をしたり御神輿を担ぐのでお祭りの際に準備するものやお祭り自体の記録が残っておらず、それを撮影しておいてほしいとのリクエストを受け、はじめは本当に備忘の記録のためだけに撮影をしていました。

しかし、お祭りの状況をこんなに真近で撮れるのはむしろ特権では、と感じ、とにかく写真を撮っていました。そうすると御霊入れから2日と少しの期間で5000枚ほど撮影をしていました。私はプロのカメラマンではないのでプロのような写真は撮れないですが、皆さんのお祭りの参加の様子を、ありのまま、すごく笑顔の写真を直近で撮ることができました。

今後の活動のひとつとして、その神田祭での写真を使って写真展をできないかと、錦町二丁目で一番大きいビルを所有されている町会員でもある企業様と相談しています。

なぜそれを実施したいかという、錦町二丁目は土日は本当に静かで、近隣のコンビニも閉まってしまふところがあるくらいです。土日は飲食店も開いていないところが多いです。平日だけ職場や学校に来ている人たちは神田祭をやっているのも土日だから知らない。だからまずやっていることを知ってもらいたい。2年に1回なので次回までが長い。でも写真展をして、その前で半纏を着て写真を撮ったりしたら今年自分も参加したような気分になれるのではなって次回開催を楽しみにしてもらえるのではないかと考えています。

企業に勤めて町に来ている方は多いのに、町会の活動は知らない。町の人口が減っている。そんな状況の中、誰でもかれでもではないけれど、やっぱりお祭りに参加してくれる人を増やしたいですし、そこはやはり町会に関わっている人間がきちんと伝えていくことが必要だと思っています。

私はよそ者ですが、敷居が高いのは良くないと思っています。かと言って崩すのがいいとも思っていません。またよそ者が取って代わってはいけないと思っていますので、町会の方が守っていきたいものをきちんと伝える、それは中の人間ではないからこそ、おなじように中の人でない人とを繋げていけるのではないかと考え、そのお手伝いをしたいと思っています。

区の施策に求めることということですが、私は千代田区民ではないので区の施策は区民のためにあるものだと思いますので立場としてどうなのかというところはありますが、千代田区が推進されているウォークラブルなまちづくりに関して活動を募集しているのを私は知っています。そのような施策についても私が住民ではないので言い切れない部分はありますが、自治体の施策というものは発信されている方が思うより現場には届かないものだと思いますので、発信がいろんなところでされると、ちょっとしたことでも「こんながあるんだ」と気づいたりもできると思いますし、告知が小さいなども同じようにやっても気づかれないなどがあるので、より伝わりやすい工夫ができるといいなと思います。

また錦町二丁目はInstagramをやっていますので、いろんな情報を発信して輪に入るきっかけを作れるようにしたいと思っていますので、区の施策ももっと届く方法があれば良いなと思いました。

私は最近区長のInstagramをフォローさせていただいたのですが、すごく発信されていると感じています。昨日の津波の警報がありましたが、ヤフーニュースで千代田区が避難所開設の案内を出したというのを見て千代田区は対応がとても早いなと思っていたのですが、今日区長のInstagramのストーリー

ズで千代田区の防災アプリや帰宅困難時の LINE などの情報を発信されていて、このように身近に届くことや発信される方が増えるともっと区の施策も届きやすいのではと感じましたし、多くの方に情報が届くといいなと思っています。

